

身体に刻みこまれた二つのことばの記憶

―手話・触手話・指点字からみた日本語―

坊農 真弓 (国立情報学研究所/総合研究大学院大学)

1. はじめに

私は社会言語科学会から3度にわたり賞をいただいた。1度目は第5回徳川宗賢賞萌芽賞(2005年度)、2度目は第23回社会言語科学会研究大会発表賞(2009年度)、3度目は第11回徳川宗賢賞萌芽賞(2011年度)である。これらの受賞経験が幾度も私を支えてくれたことは言うまでもない。また、これらの受賞に際し、徳川宗賢賞選考委員会委員の先生方による選考や、大会での授賞式の準備など、多くの方々のご尽力があったことと思う。今回、このような講演の機会をいただき、私の感謝の気持ちを示す場所を得られたことに非常に感謝している。

2. 受賞論文

以下では、徳川宗賢賞萌芽賞の受賞対象となった二つの論文について紹介する。

2.1 相互行為的視点(坊農・片桐, 2005)

私は2005年3月に神戸大学から博士号を授与された。第5回徳川宗賢賞萌芽賞の対象となった論文は、博士論文の根幹をなすものであり、指導教官の片桐恭弘先生の指導のもと書き上げたものだった。本論文では対面コミュニケーションにおけるジェスチャーと視線と発話の協調を実証的に分析することを通し、「相互行為的視点」という新しい概念の提案に挑戦した。本論文では、言語学や心理言語学で扱われてきた表現主体がことばやジェスチャーを産出する際に対象に思考する視点を「叙事的視点」としてまとめた。その上で、会話などの日常的相互行為上を捉えるには、新しいタイプの視点概念が必要であることを主張した。その新しいタイプの視点概念というのが本論文で提案した「相互行為的視点」である。

私は学部時代に日本語学を専攻していた。その当時、日本語の命題と命題に対するモダリティや対人モダリティの考え方に触れる機会があった。我々が提案した「相互行為的視点」の考え方は、ことばのみならず、ジェスチャーや対話相手に向ける視線のふるまいにも「命題」と「モダリティ」の議論が適用可能であることを主張するものであった。学部時代に学んだ日本語学と、大学院時代に学んだジェスチャー研究や会話分析の考え方を融合させることを試みた結果、生まれた論文である。

2.2 手話会話に対するマルチモーダル分析(坊農, 2011)

次に、現在の所属の助教をしていた時、2度目の徳川宗賢賞萌芽賞受賞の連絡をいただいた。本論文は、手話を言語として社会に認知させようとする「言語中心的な手話研究(例:手話言語学)」から、手話が日常場面でどのように用いられているかに焦点を当てた「コミュニケーション論的な手話研究」へのパラダイムシフトを試みたものだった。私自身、手話を研究対象にした初めての研究論文だった。研究の方法や概念に着目した1度目の受賞論文に比べると、本論文は手話を取り巻く社会的な動向にも触れ、方法論的パラダイムシフトだけではなく、社会を包含したパラダイムシフトを目指している。

手話には書きことばがない。本論文ではジェスチャー研究の分野で提案されたジェスチャー単位とジェスチャーフェーズの考え方を手話動作に適用することを試みた。本論文は、ジェスチャー単位の概念で詳細に書き起こした手話動作のタイミングが会話におけるリソースとして分析可能であることを会話分析の手法を用いて示したところに新しさがある。今なお同様の手法を用い、手話相互行為分析を続けている。本論文は私の研究能力を測り、なおかつこれからの研究の方向性を示す試金石のようなものとなった。

3. 手話・触手話・指点字の相互行為への展開

さて次に、徳川宗賢賞萌芽賞受賞後の展開について触れたい。本予稿集原稿の表題にもあるとおり、現在は手話に加え、触手話と指点字も研究対象にしている。

3.1 手話・触手話・指点字からみた日本語

手話からみた日本語

坊農(2017)では、日本手話を日常的に用いるろう者が「言葉探し」をする場面において、音声日本語由来の口の動きである「マウジング」を多く用いていることを主張した。マウジングは音声日本語由来であるがゆえに手話研究ではそれほど多く研究されてこなかった。しかしながら、日本のろう教育では手話の使用を禁止していたことや、ろう者が日常的に出会うのは手話を用いるろう者だけではなく、日本語を用いる聴者であるという事実から、日本のろう者は日常的に日本手話と日本語のバイリンガル・バイモーダルの状態にあることは疑う余地が

ない。音声言語由来のマウジングに着目することは、手話話者が手話を使っていないということを主張するのではなく、バイリンガル・バイモーダル状態にあるろう者が臨機応変に二つのことばを使い分け、相互行為の進行性(progressivity)を維持しようとしているということを主張することに繋がると考えている。

日本におけるマジョリティ言語である日本語は、おなじく日本にありながら異なるマイノリティ言語を用いる手話言語コミュニティに、多大なる影響を与えている。しかし、それは悪影響というより、口という別の表現モダリティを手による手話と併用するといったろう者独自の形で発展し、日本語がむしろ有効活用されているということができないのではないだろうか。手話相互行為において日本語の影響をみることはろう者の柔軟さと巧みさをみることに繋がると考えている。

触手話からみた日本語

触手話は視覚言語の手話から触る形に変更されたものである。触手話の研究はまだ始めたばかりであるが、触手話使用歴が浅い人と触手話使用歴が長い人を比べると身体の使い方が多少異なるように感じている。触手話使用歴が浅い人は、対話相手が自分と同じ盲ろう者であっても相手に触られている手のみならず、マウジングやうなずきといった手以外の身体部位が頻繁に動いている。この現象を「手話話者時代の名残や身体の記憶」とみるか、手以外の身体部位の動きも結果的に振動として手に伝わるので「相互行為資源として利用可能なもの」とみるかで、いまそれらの捉え方をデータから精査しようとしている。触手話は日本手話の変種であることから、マジョリティ言語としての日本語の影響を多分に受けている。またうなずきや表情などは、日本語のみならず日本文化に根付いた日本人らしさを思わせるそれである。

指点字からみた日本語

指点字は日本語のひらがなを盲ろう者の指に打つものである。よって、指点字は書記日本語をコミュニケーションの形に変えたやりとりといえる。指の打点組み合わせで表現されたひらがなを順番に打っていくコミュニケーションは一見するとデジタル情報だけが伝達されるように思える。しかしながら、指点字を考案した盲ろう当事者の福島智氏によると、熟達した指点字通訳者は打つ際の速度や指圧によって話者の態度や感情までも表現でき、実際にそれらが福島氏に伝達されているという。

音声言語におけるイントネーションのような情報が指の速度や圧力によって示されているのかもしれない。紙に打つ点字や紙に書く文字にはイントネーションによる態度や感情表現は表現されないが、これらがひとたび対面した対話相手の指の上に表現されると、色とりどりの態度や感情が浮かび上がってくる。坊農・片桐(2005)で提案した相互行為視点の考え方、命題とモダリティの考

え方が身体にも適用できる主張が、ここでも生きてくる可能性がある。

3.2 身体に刻みこまれた二つのことばの記憶

表題にもある「身体に刻みこまれたことばの記憶」とは、ことばとその使用にまつわる身体的な記憶のことを示そうとしている(坊農, 印刷中)。ここでいう二つのことばとは、日本語と日本手話のことである。言語研究の一部には、言語獲得や言語習得の議論がある。私は手話、触手話、指点字を研究対象としてみたとき、これらが獲得されたものとして語られることに多少の違和感を感じることがある。獲得すると表現すると、脳内に完全な形で格納されたようなイメージを持ってしまう。言語に完全な形など存在するのだろうか。坊農(2017)で示したように、ろう者は相互行為上で手話と日本語間を行き来したり、ときに両言語を同時に別モダリティで表現したりする。ことばは我々の身体に記憶され、自分が表現したいことを表すためにその都度有効な記憶が呼び出されると考えることはできないだろうか。相互行為の進行性を停滞させないようにしながら、これまでの言語体験を参照しつつ、私たちは今日もことばを紡いでいる。

4. 社会言語科学会へ期待すること

この原稿からも分かるように、私は研究内容について日々夢想し、考えや興味が拡散していくタイプの間である。そんな私にとって、社会言語科学会は考え方や興味をなんとか収束させ、研究論文の形にしていくための場であった。社会言語科学会がこれほどまでの多様性を持って継続し、いまなお拡大の一途を辿っている背景には、学会に関わるすべての人の思いがあると思う。徳川宗賢初代会長が掲げたウェルフェアリングイスティックスの考え方はいままさに私たち一人一人が形にし、さらに拡大していつている。社会言語科学会にはこれからもオープンマインドで新しいことに挑戦して欲しいと思っている。これまで以上に、言語・コミュニケーションに興味を持つ多種多様な研究者が出入りし、年齢や経験に寄らない自由な発想が評価され、混ざり合いながら発展していく学会であってほしい。

謝辞 本稿の執筆機会を下さったみなさまに感謝する。本研究は科研費 17KT0065 によって支援されている。

参考文献

- 坊農真弓 (2017). 手話相互行為における即興手話表現—修復の連鎖の観点から— 社会言語科学, 19(2), 20-31.
- 坊農真弓 (印刷中). 身体に刻みこまれた二つのことばの記憶—即興手話表現という実践— 菅原和孝・岩谷彩子(編) 身ぶりと記憶 ナカニシヤ出版.